

エンカレッジスクールでの英語授業

—2年間の試行錯誤とモチベーション向上の工夫—

木村 豪

1. エンカレッジスクールとは

簡単に言うと、中学校までにさまざまな事情があり、生徒本来の実力が発揮できなかった生徒に対して、中学校(時には小学校)レベルの内容から学び直しをしていく東京都立の高等学校です。その理想の実現のために、「エンカレッジ」の名の通り、生徒を励ましたり、勇気づけたりします。授業はユニバーサルデザインを取り入れて行われます。

生徒の実態は1人ひとり異なっていますので、個に対応していく指導は絶対に必要です。しかし、エンカレッジスクールは「全日制課程普通科高等学校」ですので、授業においては全体指導も必要です。

2. 筆者の経歴

筆者は、第2次ベビーブームのピークの少しあとに生まれました。そのため、大学受験は現在よりも熱を帯びていました。当時の大手予備校では、1つの教室に200人～600人の生徒に対して、「カリスマ」と言われる先生が授業を引っ張っていました。そのような時代に大学受験をしたので、「カリスマ」先生にあこがれて、大学生時代から予備校の教務や塾講師を6年、その後私立高校の標準的進学クラス(GMARCHや中堅国公立大学以上への進学が目標で、クラスの約半分がそれを実現)の担任・授業担当を18年してまいりました。つまり、大学生時代のアルバイトからずっと、大学進学に向けた指導を中心に授業をしてきました。

ところが、縁があって、2023年度、大学受験や資格試験というものを学習のモチベーションにはしない生徒が多くいる、エンカレッジスクールの高校の教員になりました。つまり、2023年度4月からは、約20数年実践してきたこととは大きく違う指導をすることになったのです。

正直、それまで学んで実践してきた教育理論が通用するのか、自分の中でも挑戦でした。ここでは、

約2年間エンカレッジスクールで授業をするにあたり、個人的に考えてきたことや工夫を紹介します。

3. 勉強ができればやはりうれしい

勉強が苦手・嫌いな生徒も含め、やはりほとんどの生徒が、勉強ができるようになればうれしいし、わかればうれしいと思っています。教師は生徒にその感覚を与えることが大切です。

4. 常識を打ち破る

多くの生徒の進路希望や将来の英語の必要性を考え、「英語を、いわゆる『主要科目』とは思わないで指導する」ことにしました。授業はきちんと行いますが、成果(英語力向上)はあまり求めないことにしました。全員に求めることは、「授業中だけは、苦手かもしれない英語にも頑張って取り組む姿勢」だけです。このような「苦手なこと」「嫌なこと」でも頑張れる力を、授業という集団の力も借りられる場所で身につけることこそが大切なのです。

そこでまず、世間一般的な〔予習〕〔授業〕〔復習〕という黄金サイクルを、すべて授業内に盛り込むようにしました。「予習している前提で授業を進めるよ」「教えたことは復習しているからもうできるよね」という理屈はほぼ100%通用しません。そのため、本来であれば予習すべきことを授業の中に取り入れます。もちろん、本来の「授業」で行うことも授業内に入れます。その後、本来であれば生徒個人が行う復習の内容も授業に取り入れます。進度は遅くなりますが、定着という観点からすると、授業中に繰り返すことで生徒にはちょうどよいと思います(わかっていない、覚えていないのにどんどん進むとかえって逆効果です)。

また、授業はプリントを使って進めていますが、そのプリントをレッスンごとに冊子形式にしました。そのため、プリントの配布は、各レッスンで(原則)

1回で済みます。また、授業中に冊子に書き込んだ内容を、授業後に Microsoft Teams のグループに投稿して、生徒がいつでも見ることができるようにしました。その結果、プリントの配布の手間が減り、また、授業を休んだ生徒のフォローが格段に楽になりました。

さて、単語帳をベースとした語彙指導・語彙テストは多くの学校で行っていると思います。語彙テストの方法も、一般的な進学校とは違うと思われる。エンカレッジスクールでは、単語テストがある日の休み時間に、集中して単語の見直しをする生徒はほとんどいません。従って、授業開始後すぐにテストをすれば、ほとんどの生徒があまり点数を取れません。それでは単語の学習をしている意味はありません。そのため、あえて小テストの前に10分～15分の見直し時間を与えています。この時間には、音読(音による確認)や、スペルを覚える勉強など、書いたり読んだりペアワークで問題を出题したりというさまざまなことをしながら工夫しつつ、結果的に自分が覚えやすい方法を見つけ、限られた時間の中で集中して覚えることを学んでもらう時間としています。この方法は一般的には批判もあるかもしれませんが、生徒はそれなりに点数が取れるようになるのでうれしく思い、また、覚えるコツも学びます。そして「自分もできた」という経験が、「また頑張ろう」というモチベーションにつながります。

5. 10～15分を区切りに+4技能5領域を上手に取り入れて、飽きない授業の組み立てを！

英語が苦手な生徒が、50分の授業に集中するのは大変なことです。そのため、1時間の授業内容を3～5つの区切りに分けます。10～15分なら、多くの生徒が集中できるからです。

私はその中で、「単語帳による語彙指導(または帯活動)」と「教科書の音読指導」の2つは、原則として必ず入れるようにしました。音読指導も、発音指導やコーラスリーディング(=教師のあとに続いて生徒が一斉に音読する)、シャドーイング、ルックアップ、穴埋めをしながらの音読など、多様な方法があるので、単調にならないように、生徒の習熟度に応じて飽きないように励ましながら(おだてながら)頑張らせます。この2つ以外では、本文の解釈やペアワーク、英問英答、発表などを行っています。

現在の英語の指導は、4技能5領域と多岐にわたります。そのため指導も大変なのですが、それを逆手にとって、多角的なアプローチを1つの授業の中に取り入れるのです。時にはどうしても、文法や英文構造の説明、または各々の活動が長くなってしまいう時もあります。正直に告白すると、その時は、授業の途中3分程度は、おしゃべりをしたり仮眠したりすることを許すこともあります(ただし、その後はきちんと説明を聞いたり、集中して活動を続けたりすることを約束させています)。

さて、ここまで述べた通り、授業で扱う内容は毎回違って多様なメニューになります。生徒の意識づけのためと、授業に参加しやすくするために、授業の前に黒板に「今日の授業の目標」「授業の内容」を書くようにしています。

6. 易しい言葉で語るが、本質は外さない

高校の教科書を扱うと、どうしても文法指導は欠かせませんが、なるべく易しい言葉で無駄をなくし、かつ汎用性が高くなるような説明のしかたをしています。例えば、「英文の基本は『主語+動詞+α』で、動詞の使い方が『+α(授業では、動詞の後ろにくる言葉、という言い方をしている)』の種類や意味を決めるんだよ。」と説明しています。不定詞は、「日本語でも、『私はテニスを見るのが好き』と動詞が2つある場合に、片方は『見る』だけでなく『こと』がついて変化するよね。英語ではそのような変化の1つに、『to+動詞の原形』というものがあんだよ。」という感じです。ただし、生徒のために極力パターン化もしています。より高度なものを求める生徒には個別対応をしています。

また、意味のかたまりに慣れさせるために、チャクごとに英語→日本語の順に音読させ、英語を英語の語順で理解させる取り組みも入れています。

7. 生徒は印象に残る説明は覚えている

英語は英語で理解する(させる)指導が理想なのでしょうが、すべて理想通りに進むのであれば、今頃英語教育がこれだけ世間から文句を言われるはずはありません。特に英語を本気でマスターする気がない生徒にとっては、1時限の中で1つだけでも何か身につけてくれれば上出来です。また、(英語ではなく)日本語の説明で生徒の印象に残ってくれるも

のがあってもよいと思います。

例えば、某チョコレートで「Have A Break, Have A KitKat」というキャッチフレーズがありますね。ここでの break は「キットカットを折って、休憩しよう」という洒落です。この説明をし、さらに「だから丸くて折らないキットカットはキットカットではない!」とあえて熱く語り、笑いをとります。この説明は多くの生徒の印象に残ったようです。約半年後に break がまた出てきたときに、「以前キットカットの話をしたのを覚えている?」と聞いたら、ほとんどの生徒が覚えていました。半年前に学習した内容も覚えているのであれば、今後も多くの生徒は覚えてくれているでしょう。このようなネタを多くもつことも教師としては大切でしょう。

8. 生徒が「なぜ?」を気軽に言える授業の雰囲気

the の単独での発音をあえてカタカナで書けば「ザ」ですが、何度も音読を重ねていくうちに、ある生徒がこんなことを質問しにきました。「先生やネイティブの先生の発音では『ジ』と聞こえるけど、どちらが正しいのですか。」また、「-er」「-or」は「人」の意味という説明をしたら、「なぜ cook は er も or もないのに料理人なんですか。」と聞きに来た生徒もいました。比較的ゆとりのある授業進捗のため、生徒もこのような疑問をもつ余裕があるのかもしれません。

9. 翻訳ソフトは積極的に利用

ある程度通じる英文を自力で書くのが難しい生徒に writing や speech を本気でさせるのは、教える方も学ぶ方も負担が大きいものです。私は、翻訳ソフトを使って英文を作ることを認めています。結果、生徒の作文の添削の時間は大幅に削減されました。生徒も「この内容は英語でこのように言うんだ。」という気づきになっているようで、8割以上の生徒が、5分で述べた10～15分を過ぎても集中して調べています。4でも書きましたが、英語力としての結果をあまり求めないので、翻訳ソフトを使いながらも(もちろん教員によるフィードバックは必要です)、生徒が「言いたいことが少しでも言えた、表現を1つでも覚えた」という体験をすることが大切です。

10. 教師は英語教育に対する熱意と指導法のさまざまなネタ、型をもつ

もちろん、エンカレッジスクールの授業が最初からうまくできたわけではありません。学期ごとに反省をし、改良をしてきました。年間の最後の授業では、学校で行っているものとは別に、個人的に授業のアンケートをとることにしています。おおむね好意的な内容ですが、改善点も見えてくるので、これからも試行錯誤をしながらよりよい授業をしていきたいと思っています。

さて、どんなタイプの生徒でも「何とか授業中は頑張れる」授業を運営するためには、2つのことが大切であると思っています。

1つ目は、教師がポリシーをもつことです。エンカレッジスクールで教えるにあたり、私は「英語が嫌い、英語を必要としない生徒に対して、どのように授業をするか」を考えました。その結果、「学校という場で、興味がなく、あるいは自分に必要のないものをあえて学ぶ理由」を授業の最初に明示しました。具体的には、4でも書いたように、「授業という場を通じて、苦手なこと、嫌いなことにも頑張る取り組み姿勢を身につけるため」です。もちろん、英語が好きになってほしいことも付け加えます。

2つ目は、さまざまな指導法を身につけるということです。訳して、文法の説明をして、ワークの答え合わせをすることが中心では、多くの生徒は飽きてしまうでしょう。英語の教員として、どのようなレベルの生徒にも授業に参加させる技を身につけることも大切です。しかし、これはすぐに身につくものではありません。多くのセミナーや英語教育を研究している学会に参加し、多くの実践例を見て、英語教育の本や雑誌を読み、自分でも試行錯誤をして身につけていくしかありません。

さて、この2年間における生徒の変化の1つに、実用英語技能検定の受験者数があります。今年度は昨年比で4倍に増えました。資格試験を学習のモチベーションにする主体性が育っているのでしょう。

最後になりましたが、英語を苦手としている生徒が多く集まる学校の実践例を紹介するものは少ない気がします。この記事が少しでもお役に立てれば幸いです。

(東京都立蒲田高等学校 教諭)